

風の寒い世の中へ

小川未明

青空文庫

一

お嬢さんおじょうさんの持つてもいましたお人形にんぎようは、いい顔かおで、めったに、こんなによくできたお人形にんぎようはないのでしたが、手てもとれ、足あしもこわれて、それは、みるから痛いたましい姿すがたになつていました。

けれど、お嬢さんおじょうさんは、そのお人形にんぎように美うつくしい着物きものをきせて、本箱ほんばこの上うへにのせておきました。かわいらしい顔かおつきをしたお人形にんぎようは、いつでもにこやかに笑わらっていました。そして、あちらに、かかっている柱時計はしらどけいを小さな黒くろい目めでじつと見つめていたのです。

お人形にんぎようには、このお嬢さんおじょうさんのへやのうちが、広い世界ひろせかいでありました。まだ、これよりほかの世よの中なかを見みたことがありません。それでお人形にんぎようは、満足まんぞくしなければならなかつたのです。なぜなら、このへやは、住すみよくて、そして、ここにさえいれば、まことに安心あんしんであつたからでありました。

「どうか、いつまでもここに置いてくださればいい……。」と、お人形にんぎようは、思おもつているようにさえ見みえました。

ほんとうに、平常は、そんな不安も感じないほど、このへやの中は平和で、お嬢さんの笑い声などもして、にぎやかであつたのです。

ある日のこと、お嬢さんは、本箱の中をさがして、なにかおもしろそうな書物はな
いかと、頭をかしげていましたが、そのうちに、気が変わって、お人形に目を向けま
した。

「お人形の着物も、だいぶ色が褪めてしまったこと。こんどお母さんに、いいお人
形を買っていただきましょう……。」そういいながら、手に取りあげて、お人形を
見ますと、お人形の手はとれ、足もないので、お嬢さんはいい気持ちはいしませんでし
た。

「いくらいお人形だつて、また、どんなにいい顔だつて、こんな不具なものはしか
たがないわ。」

そういつて、お嬢さんは、お人形を机のそばにおいたくずかごの中へいれてしま
いました。

お人形は、くずかごの中にいれられて、半日ほどそのかごの中にいました。もう、
ここでは、いままで毎日のように見た時計を見ることもできません。くずかごの中は、

うす暗く、それに息づまるように狭苦しくありました。ただ、そこにいる間は、なつかしいお嬢さんの唄の声を聞いたのでありました。その顔を見ることはできませんでした。そのうちに、下女が、このへやにはいつてきて、あたりをそうじしました。そして、最後に机のそばにあったくずかごを持つて、はしご段を降りてゆきました。はしご段を降りたことは、お人形にとつて、知らない世界へいよいよ出ていったことになります。いままで、長い間住みなれた、平和な、にぎやかな、明るい、変わったところの何事もなかった、このへやに別れを告げて、思いがけない、まだ見もしない、知りもしない、世界に出てゆくことになったのでした。そして、そのことは、人形ばかりでなく、お嬢さんもこれから、いままでかわいがった、自分のお人形がどうなるかということは、考えつかなくったことでありました。

二

下女は、無神経に、くずかごを外の大きなごみ箱のところへ持つていつて、すっかりその箱の中へ捨ててしまいました。くずかごの中に、いったいどんなものはいっている

かということも、そのときは頭あたまに考えかんがえずに、まったくほかのことを思おもっていました。そして、下女げじよは、ふたをしてしまいました。

ごみ箱ぼこの中で、お人形にんぎようは、黄色きいろなみかんの皮かわや、赤あかいりんごの皮かわや、また、魚さかなの骨ほねや、白しろい紙かみくずや、茶ちやがらなどといっしよにいましたが、もとより箱はこの中には、光線こうせんがささないから、真まつ暗くらでありました。

こうして、そこにお人形にんぎようは、幾日いくにちばかりいましたでしよう。もはや、そこでは、時計とけいも見えなければ、また、あのなつかしいお嬢じようさんの唄うたの声こえも聞くことができませんでした。

そのうちに、そうじ人にんがやってきました。彼は、箱はこのふたを開あけると、大きなざるの中なかへ、箱はこの中のごみをすつかりあけてしまいました。そして、それを車くるまの上うへについている大おおきな箱はこに移うつしてしまいました。お人形にんぎようは、ごみの中なかにうずまってしまったのです。

これから、自分じぶんは、どんなところへ持つてゆかれるのか、お人形にんぎようの小さな頭あたまの中なかでは、想像そうぞうもつかなくったのであります。ただ、そのうちに車くるまがゴロゴロと動きはじめたのを知るしばかりでありました。

この車くるまが、街まちの中なかを通り、街まちを出ではずれてから、道みちのわるい、さびしい村むらの方ほうへはいつ

ていったことも、もとよりお人形にはわかりませんでした。

やがて、この大きなごみ箱をのせた車は、あるさびしい郊外のくぼ地に着くと、そのところどまりました。そして、たくさんのごみといっしょくたに、くぼ地の中へあけられました。くぼ地には、こうして運ばれてきたごみが、すでにうずたかく積まれていましたけれど、まだそのくぼ地をうずめてしまうまでにはなりませんでした。

そうじ人は、ごみための箱の中のごみをあけてしまうと、空き車を引いて、あちらへ帰ってゆきました。お人形は、くぼ地の中へ仰向けにされて、ほかのごみくずの蔭になつて捨てられていたのであります。

「ああ、ここはどこだろう？」と思つて、お人形は、あたりを見ますと、さびしい野原の中で、上には、青空が見えたり、隠れたりしていました。そして、寒い風が吹いていました。そばに、雑木林があつて、その葉の落ちた小枝を風が揺すっているのです。お人形は、寒くて、寂しくて、悲しくなりました。いままでいたお嬢さんのへやが、恋しくなりました。本箱の上に、平和で、雨や、風から遁れて、まったく安心していられた時分のことを思い出して、なつかしくてなりませんでした。そして、どうしたら、ふたたび、お嬢さんのそばへゆき、あの住みなれたへやに帰られるだろうかと思つていま

した。

ある晩のことです。お嬢さんは、ふと、いままで本箱の上に置いて、お人形のこ
とおも思ひ出していました。そして、下女を呼んで、

「あれから、ごみ屋さんがきて？」といって、たずねました。

「今朝きて、すっかり持つていつてしまいました。」と、下女は答えました。

お嬢さんは、人形の行方を思つたのでした。しかし、それは、どこへ、どうなつて
しまったものか、ほとんど想像のつかないことでした。

「つい、二、三日前まで、私といつしよにこのへやの中にいたのに……。」「と思うと、お
嬢さんは、ほんとうにかわいそうなことをしたものと後悔したのであります。

捨てられたお人形は、一晚、ものさびしい野原の中で、露宿しました。嵐の音
をきいておそれていました。気味悪く光る星影を見ておののいていました。しかし、幸
いに、雨が降らずにいましたから、着物は霜で白くなりましたけれど、そんなにぬれず
にすみました。

夜が明けると、雑木林のこちらへ差し出た枝に、からすがきて止まって、鳴いていま
した。これを見ながら、お人形は、お嬢さんはいま時分、起きて、学校へゆく支度

をなさっているだろう？ などとおもっていました。

三

その日の昼ごろのことです。どこからかみすばらしいふうをした、乞食の子が、このごみためへはいつてきました。そして、ごみを分けて、なにかないかとあさっていました。乞食の子はかん詰めの空いたのや、空きびんなどを撰っていますうちに、お人形を見つけて、手に取りあげました。そして、これを袋の中へいれて、街の方へと歩いてゆきました。

ごみための中から、去ったお人形は、この後どうなるだろうと、袋の中で思っていました。

乞食の子は、街の方へ歩いてゆきました。そして、町はずれにあつた、一軒の小さな家の前へくると、その家をのぞいて声をかけたのです。その家は、店さきに、いろいろの泥人形を並べていました。家の中から、おじいさんが顔を出しました。すると、子供は、袋の中から、拾ってきた人形を取りだして、おじいさんに見せました。おじいさんは、

手にとつて、それをながめますと、

「ああ、これはいい人形だ。私が、手足をつけて、ひとつりっぱな人形にこしらえてみせよう。」といつて、子供に、いくらかの金をやりました。子供は、喜んであちらへ去りました。

お人形が、人の好いおじいさんの仕事場へつれてゆかれました。その仕事場には、いろいろ、さるや、犬や、人や、また、ねこなどの形が造られていました。これらの粘土細工は、驚いた顔つきをして、急に、その仕事場へはいつてきた派手な着物を着たお人形を見つめているようでした。

おじいさんは、眼鏡をかけて、このお人形の手を造り、足を造つてくれました。そうして、その手や、足を、ちようど顔の色と同じように、白く塗つてくれました。お人形は、これで、どうやら、不具でない、満足の姿になつたのであります。

「ああ、こうなればりっぱなものだ。顔がきれいなことから、きつと、だれか目につけるにちがいない……。」といつて、おじいさんは、この人形を自分の家の小さな店さきに、ほかのおもちやといつしよに並べておきました。

お人形は、お嬢さんから着せてもらったままの着物でありましたが、手足ができて、

満足な姿になると、いくらか色の褪せた着物も、なかなかりっぱに見えたのであります。
 お人形は、この家の店ききに並べられてからは、あの野原のくぼ地に捨てられたやうな心細さは感じなかったけれど、いつまでも、お嬢さんのへやにいた時分のことを忘れることはできなかつたのです。そして、行く末のことなどを考えると、希望もひらめきました、また心細くもありました。自分がこんな満足な姿になつたのを、もしや、お嬢さんが、この家の前を通りかかつてごらんになつたら、ふたたび連れて帰つてくだらないものでもない、さまざまに思つて、お人形は、その日、その日、家の前を通る人々をながめていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年3月

※表題は底本では、「風《かぜ》の寒《さむ》い世《よ》の中《なか》へ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風の寒い世の中へ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>